



100キロチャリティウォークの仲間たちと(右手前が筆者)

就職口は多数あった。長く働きたい、家族が近くに住んでいると何かと便利だと思いい、出身地の横浜にある輸送関係の会社に就職した。新卒として入った会社で社会人の基本をいろいろ教えていただき長く働きたいと思ったが、金融関係の仕事をしたかと思いはじめ、四年後現在の会社ロイタージャパンに転職した。それ以来かれこれ一〇年以上同社で仕事をしている。仕事内容は入社して五、六年ほどは株式関連情報のデータベース管理、後半の五、六年は債券関連情報の新規データ構築および運用である。最近では債券関連情報データベースのチームリーダーとしてのまとめ役の仕事が加わった。本社がイギリスにある関係で、オフィスにも外国人が多く、日々仕事上で関わる人々が多国籍にわたる。自分自身の直属の

現在

上司もシンガポールにいるシンガポール人であったり、各々データベースの開発チームが、あるデータベースは香港にあるので香港人、また、あるデータベースはインドのバンガロールにあるのでインド人、あるプロジェクトのコーディネーターはイギリス人だったりと多岐にわたる。いろいろな国の人と仕事で接する際に外国人との関わり方の原点をUWCで一緒に学んだ同級生に結び付けていつも考えているように思う。たとえば、インド人だと、あ、UWCでのインド人の同級生が〇〇な人だったから、この人も〇〇な人だろう」と。

高校生という多感な時期に親元を離れて多くの国籍の生徒と学生生活を送るといって貴重な体験の機会を得たおかげで、現在企業活動や余暇の活動を通して国際理解に少しは貢献できているかなと思う。最近では趣味の一環でもあるスポーツをしながらのチャリティに参加したりしている。五月には同僚と箱根の山越えを含む一〇〇キロを四八時間以内に歩き切る途上国支援のためのチャリティウォークに参加した。

UWCのサポートおよび寄付をしていただいてる方々に近況報告の形であるが御礼に代えさせていただければ幸いである。

中央公論 6月号

発売中! 定価800円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-3-7 中央公論新社
TEL 03-3563-1431

病院が崩壊する

そして医師はいなくなった 久坂部 羊

患者が日本の病院を捨てる日 川淵孝一

良い病院、悪い病院——選別の極意とは 米山公啓

自治体病院の現場からみた
地域医療の破綻の姿 毛利 博

医療立国 大村昭人

私が涙で「千の風になって」を
歌えなかったとき… 新井 満×秋川雅史

2008年、中国リスクに備えよ 李登輝×井尻秀憲／山本一郎 氏

安倍広報、その危機の内幕 世耕弘成 宮崎県・オイがしがらみ断っ切っど 東国原英夫

ACCの思い出と現在

一九八三―八五年UWCアトランティックカレッジ(ACC)に留学。一九九〇年上智大学外国語学部比較文化学科卒業。同年運輸会社入社。九四年ロイター・ジャパン入社、株式会社および債券情報データベース運用を担当、現在に至る。

留学の動機

私がUWCを受験したと思ったきっかけは、小学校の高学年になる頃から英語の塾に通ったため、英語で外国の方と話す機会があり、当時海外に行ったことのない私(今では小さい頃から家族旅行は海外というのは珍しくないことと思うが)は「外国」というものにとっても興味を持つようになり、高校に入学以来一刻でも早く海外の人たちと一緒に勉強がしたいと思ったからである。小学校の卒業文集には通訳になりたいと書いていたことを思い出す。今思うと何不由なく育ててもらい、独立心旺盛な子供であったと思う。

ACCの思い出

私はイギリスのアトランティックカレッジ(ACC)に派遣されることに決まった。成田空港で家族と別れた時はさすがにしばらく

ロイター・ジャパンデータ部チームリーダー

佐々木真理

ささき まり

く家族とは会えないと思うと涙が出てきたが、ホームシックにはかからないと思っていた。しかし三カ月くらい経ち、英語もあまりわからないし、イギリス人の同級生などの両親が学校に訪ねてくるのがとても羨ましかったり、憧れの海外生活が楽しいことばかりではない現実と直面し、またそれまで長期間家族と離れて過ごしたことがなかったのも本当に日本に帰りたくなった。日本を離れる前まで世間知らずの私にとって家族は空気のような存在で、離れてみて初めて本当の家族の大切さを理解できた気がする。

ACCでの楽しかった思い出と言えば、各国の文化や習慣を寸劇や出し物のようにして披露する、各国の夕べのイベントであるアフリカのダンスや南米の民俗音楽の舞台が特に印象に残っている。「Japan evening」では一緒に日本から行った同級生が茶道を習っていたので簡単な「お茶会」や

●(社)ユニテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四〇七名の卒業生を輩出している。

日本独特の「お見合い」の寸劇などをやったように思う。一年目の夏休みにリュックを背負ってヨーロッパを旅行した時に、おにぎりを食べていたらマンゴーと交換してくれと言われたことも楽しかった思い出として鮮明に覚えている。勉学の点では、日本では私は比較的勉強も運動もできると言われてきたが、各国の生徒たちがいる「大海」の中でははつきり言つてできが悪かった。今思うと勉強の成績もあまりよくなかった。楽しかったことばかりではないが、勉強以外に多感な時期に各国の人と生活を共にできたことは何にも代えがたい貴重な体験だったと思う。

帰国後、そして社会人として

ACCを卒業し日本に帰国し上智大学に進学したが、学友と寝食も共にするという「濃い」ACC生活をしてきたためか、一年生の頃は特に勉学のみでの付き合いの学生生活になかなか意義を見出せなかった。一時期は大学をやめようかと考えたこともあった。大学卒業の頃はいわゆるバブル経済期で